

【第三回つばきの国俳句大賞】

2020年2月10日～16日、国重要文化財・萬翠荘で、伊予つばき協会主催による「第四十四回つばき名花展」が開かれた。

この椿展では、毎年新しく誕生した品種が紹介されているが、多くの品種の交配から新品種を生み出す努力には頭が下がる。そしてもうひとつ、今回も「つばきの国俳句大賞」で新しい俳句が誕生した。この二つの文化の創造の場に立ち会えることは実に光栄なことである。

今回の俳句大賞には、百十一句の応募があった。選者は、八木健、山口聰（伊予つばき協会会長）、小泉和子（同理事）で、最終日に結果発表と表彰があった。副賞として、大賞と優秀賞三点の俳句を八木健がアートにして贈呈し、椿の苗木や道後の入浴券も贈られた。大賞は「おじさまが一枝抱きて椿展（久松昂子）」。八木健賞は「散り椿猫の足跡見え隠れ（田代善二）」。伊予つばき協会会長賞は「大輪の椿遺して夫は逝く（重松道枝）」。伊予つばき協会賞は「ねえわたしまだ綺麗でせう落椿（日根野聖子）」。

大賞の句は主人公が男性であるところに意外性と滑稽味が生まれた。八木健賞の句は、具体的な風景がよく見え臨場感がある。会長賞は、大輪の見事な椿との対比に、夫を亡くした悲しみや寂しさがうまく表現された。協会賞は、擬人化で椿のつばきとしたところが面白い。その他、佳作の作品にも個性的で斬新な発想の句が多く楽しませていただいた。

佳作	ワイン飲み赤白つばきどちら好き	田代那菜
	寒椿すなおになれぬ姉妹	坂本淳子
	萬翠荘裏とりごゑに椿散る	三好愛子
	鳥呼びて波郷の里の大椿	沢田美文
	伊予の里とや赤い椿のおおらかに	大政コズエ
	幼なき日椿の小径遊びけり	清水國香
	にぎたつの小径を染める伊予椿	清水サツキ
	宗旦椿一花の凜と白極む	佐伯ひかる
	萬翠荘侍り集いし椿かな	脇塚耀子
	これやこの波郷が恋の椿かな	脇塚耀子
	紅の濃さ山の中より輝けり	矢野隆志
	椿展紅と黄色をゲットする	武智明也
	椿苗どれにしようか思案橋	武智明也
	満開もつぼみもありて椿展	篠崎英子
	つゝましや伊予の椿の小白蝶	松澤美那子
	思い出の父が育てた乙女椿	松内世子

ひよどりの椿をゆらし飛びたちぬ
 椿咲く堀端予後の散歩道
 暁にぽっと紅差す白椿
 いろどりの花にかこまれ細雪
 藪椿島を出て行く子の背中
 唇にシャネルを塗りて紅椿
 清い白や薄綺羅のよう椿かな

梅岡典子
 高橋洋
 大森英子
 重松智子
 桑田愛子
 上山美穂
 岡田廣江

